詩余ものがたり　北宋篇（六）

――清・葉申薌『本事詞』――

松尾肇子

六十七、王安中

王安中（字は初寮）が賀州の劉将軍の家にいたとき、カーテンを隔てて琵琶の音が聞こえました。そこで戯れに〔臨江仙〕を作って次のように言いました。

鳳のばち　鵾のいと　夜の永きに鳴けば、
もしや（「琵琶行」の舞台となった）潯陽にいるのではあるまいかと疑う。
かすかな雲　薄い霧が　化粧したばかりの人を隔てる。
若い娘の言葉が、
にわかに声高になるのを聞くばかり。

しばらくながめていよう　金泥がそのおもざしを飾り、
指のあとが赤い桑のようにかすかに残るのを。
残るぬくもりと素晴らしい香りと　なんと豊かなこと、
船を移して近づいてもよかろう、
とばりを巻きあげるのを又た何が妨げるというのか。

六十八、李之儀と楊姝

李之儀（字は端叔）は当塗に左遷されると、そこに家を持ち、姑渓居士と号していました。黄庭堅が太平州の知事になった時には、一緒に石洞を遊覧し、楊姝が履霜操を弾くのを聴き、黄庭堅の詞の押韻に合わせて作った詞を贈り、次のように言いました。

互いに見つめ合ってふたりとも言葉も無く、
恨みはまた千々に重なる。
人を悩ませる深いところが、
両目の物憂げなまつげに別にある。

七本の弦は素晴らしくはあるが弾くまでもない、
香りよいそのほおに酔うことだけを願っている。
只だこわいのは　近ごろの気持ちが、
風に吹かれる秋の葉のようなこと。

後にもさらに〔清平楽〕〔浣渓沙〕を贈っているところを見ると、このご老人もまたこの歌姫に寄せた情を忘れることができなかったの

でしょう。

六十九、李之儀の茶詞

李之儀の昔の恋人が、餅のように固めて龍の型を押した上等の茶を送って詞をねだったので、〔満庭芳〕を作って応じました。その詞はこのようでした。

花咲く道は千筋、
真珠の簾は十里もつづく、
夢のなかではまだ揚州（ヨウシュウ）にいる。
月は天の川に斜めにかかり、
酒に酔い歌ったあの高楼を覚えている。
赤い綾絹の小さな吟箋に詩を書いたのは誰だったか、
風に飛ぶ柳絮は、天が与えた風流。
春はいつでもあるのに、
仙界は道に隔てられ、
空しく魚釣りの船を浮かべるのだ。

新たな秋。
雨が通り過ぎたばかり、
龍の型を押した茶を細かく挽けば、
雪のように白い泡が茶碗に浮かぶ。
どこにいるかと心をこめて尋ねて、
ねんごろに書き送る。
（捨てられた女がいるという）長門を思って賦し終わると、
のどがひどく渇くが、むくいる物もない。
情は尽きることなく、
金の扉　玉の立て札のその場所を、
いつになればもう一度尋ねることができるだろう。

七十、蔡伸（さいしん）と芸妓

蔡伸（号は友古（ゆうこ）居士）が、宣和年間のこと、燕山（エンザン）にふれぶみをささげ持って赴きました。途中、莫州（バクシュウ）の村里を通ると、州の長官が箏辺閣でもてなしてくれました。陳文（ちんぶん）という有名な芸妓がその席で酒食を勧めてくれました。翌年戻ってくると、陳文はすでに妓籍を抜いて出家していました。崔（さい）長官に頼んで、無理に彼女を招いてもらったところ、しとやかで優雅なおもむきは、初めて会ったときよりもさらにまさっていました。そこで〔小重山〕を作り次のように詠じました。

流れる水　桃の花　仙人の住む小さな洞。
壺のような洞の中では春は衰えず、
ほこりにまみれた世俗に勝る。
朝焼け色の衣　鶴の羽のコート　それに桃の冠。
新しい粧いは素晴らしく、
おもむきはますます風にひるがえるかのよう。

修行の功徳は三千を満たして成った。
水銀と朱砂とで、
丹薬を錬る。
劉様はかつて一緒に昇仙しようと約束して、
十ヶ月、
神仙を祭った小さな壇で修練した。
また常州（ジョウシュウ）の副長官だったとき、秦中（シン）の芸妓が来て妓籍に入りまし

たが、所作が四角四面で重々しく、木の人形のようでしたから、仏様と皆が言っておりました。そこでたわむれに〔蝶恋花〕を贈って次のように言いました。

如是我聞（このように私は聞いている）、
仏様が俗世におでましになり、
一足飛びに如来の地にお入りになるや、
慈悲の方便で衆生をお救いになるという、
端正で重々しいそのお姿は誰と比べられようか。

四方の衆生は、
ことごとく歓喜し、
有情のものどもはともに（弥勒様の下生を祝う）龍華会に赴き、
無憂帳の中で良縁を結ぶ、
摩訶修修哩修哩（口をきよめよう）。

七十一、蔡伸の侍女

蔡伸には侍女がいて、容貌も芸も群を抜いていました。孫覿（字は仲益）は彼女に会うと、「第一流」と評しました。蔡伸は感謝して〔采桑子〕を作って次のように言いました。

奇花は普通の花とは比べものにならず、
南の地に一人傑出している。
過ぎ去った事どもははるかに去ったが、
鶴に乗って千年ぶりに舞い戻り以前の遊びを思い出す。

その仙人のご老人はご機嫌で、
すっかりよっぱらって長っ尻。
すばらしい筆跡で、
人間第一流と書き記した。

七十二、蔡伸の象棋（中国将棋）の詞

象戯の名称は古くからありますが、おそらく今の象棋ではないでしょう。蔡伸に〔臨江仙〕の詞があって象戯をする美人を詠じていますが、これは疑いなく今の象棋です。その詞は次のようなものです。

カーテンは奥深く　清らかな昼の日長、
玉のような美人は春ののどかさに耐えきれない。
象牙のコマは金を象嵌して丸く、
将棋盤をはさんで向かい合い　みやびに遊ぶ、
小さな窓のそば。

駒を飛び越えたりまっすぐ進んだり　一目行くのもあれば　二目動いたら一目曲がるのもあり、
人に知恵を絞らせる。
盤上の勝負はかならずどちらかにかたよるもの。
あの人にいい気にさせておいて
結局私が先に勝つわ。

七十三、程垓

眉山の程垓（字は正伯）は、蘇軾と親戚で、巧みに詞を作りました。錦江の芸妓とたいそうな恋仲になり、別れる時に〔酷相思〕詞を贈って次のように言いました。

月は霜のおりた林にかかり寒々として落ちようとし、
表の門の外では、出立をうながしている。
別れはどうしようもなく、今こそまさにその時、
とどまろうとしても、留まるすべがない。
行ってしまえば、来るすべがない。

馬の上では魂もこの身から離れて行かんばかりに衣に涙し、
それぞれが、ともにやつれはてる。
川辺の道の、梅の花は開いたかまだかと尋ねる。
春が到来しても、何度でもおくろう、
人が到着しても、何度でも返事を寄こしてくれ。

また一東（いっとう）という名の歌姫が詞を欲しがった時には、〔一落索〕を贈って言いました。

ほっそりとした腰つきはすばらしく、
いっそう人の心を引きつける。
歌声が刺繍したカーテンのかげで一たびおきれば、
空を行く雲の影さえ動かなくなる。

聞くところでは　玉のような美男の家は近いのに、
春風に引き留められているのだとか。
今からは悪く思わないでくれ　一東（春一番）を見れば、
世間の譬きを圧倒してしまうのだから。

また病に臥せっておりますと、昔のなじみが蘭の花を贈ってくれましたので、〔浣渓沙〕で返礼しました。

天女は親切にたっぷりと思いを届けてくれた、
花を散らしてなお覚えている　病気の維摩詰のこと、
小さな部屋に来て　いかがと尋ねてくれる。

腰につけた帯玉をはずすのに煩わせた細い筍のような玉の指、
別れた時の鬢の香りと秋の波のような眼差しを懐かしむ、
本当に情はあるのだろうか。

七十四、汪藻（おうそう）

汪藻（字は彦章（げんしょう））が船で汴河（ベンガ）を旅しておりますと、岸に着けた美しい船に、カーテンのなかから外をこっそり見ている影が映っているのを見ました。その額だけが見えておりましたので、たわむれて〔酔落魄〕をつくって次のように言いました。

小舟のカーテンのすきまから、
美人が梅花を描いた額を半分見せている。
緑の黒髪が垂れ　刻んだような花と照り映え、
（額は）まるで秋の宵、
銀白色の半分の月のよう。

まげに垂れ下がる香りのよい赤い紐飾り、
螺鈿の蝉の髪飾りがかすかに金碧の光を揺らす。
春の山（の眉）も秋の水（の眼差し）もまったく跡も無く、
垣根のうえに、
少しも本当の糸口をあらわさないのだ。

七十五、謝遜

謝遜（字は幼槃）には「竹友詞」があります。美しい芸妓の宋瑶に〔減字木蘭花〕を贈って次のようにいいました。

風をうけた竹藪は曲を奏で、
疲れて銀の屏風に寄り添い　ようやくぐっすりと眠る。
清らかな敷物　目のあらいとばり。
金の鴨の香炉の火は消えたけれど継ぎ足しに行くのもものうい。

細やかな露の玉、
雹は縦横に風に舞い螺鈿をまいた碁盤に飛ぶ。
ふたつの眉をしきりに寄せて、
立ち尽くして何も言わないけれど　たくさんの秘めた思い。

七十六、張生

元符年間のこと、饒州の張生は太学に遊学し、東曲の芸者の楊六という者とたいそう深い仲になりました。張が試験に落ちて帰郷することになると、楊は彼と一緒になりたがりましたが、張は半年後にまた来ると約束し、もし期日を違え約束を破ることがあったなら、よそに嫁いでも構わないと言いました。張生はたまたま用事があって期日を過ぎ、都に到着したその日にすぐ彼女を訪ねましたが、その家にはもう鍵が掛けられておりました。うろうろしていますと、隣の家を借りている人が出てきて言いました。

「あなたは饒州の張さんではありませんか。楊六さんはいつもあなたが約束を守らなかったことを恨んで、学校へあなたの消息を尋ねに行くようにといつも私に頼んでいました。お母さんはひどくなじりましたが、するとますます切にあなたを思っていました。近ごろそのお母さんが無理矢理に洛陽のお金持ちに嫁がせ、わずか三日前に立ち去ったところです。出発の時に泣きながら私にたくさんお金をくれ、あなたがおいでになるのを待って、このもとの家を見せてから、他の人に貸すようにと頼んで行きました。」

張生が入ってみますと、小さな二階屋の奥の部屋には、家具もそのままで、残り香が漂っていましたが、その人の影はもうありません。物を見、その人を懐かしみ、悲しさつらさはますます募りました。帰って彼女の行き先を捜しましたが、まったく分かりませんでした。そこで〔雨中花慢〕を詠じて次のように言いました。

事は過ぎ去り　その人は立ち去った、
あたかも暮れなずむ谷に帰って行く雲か、
岡の上から流れていく水か。
どうして　丸い鏡を無理に半分にし、
悲しげな音色を響かせる絃を無理矢理切ってしまうのか。
ずっと覚えている　酒宴が終わろうとし歌も止み、
忘れられない　月の下　花のあたり。
手をつないだところ、
高いたてものの赤い戸の部屋、
目に映るものは以前のまま。

これまで向かい慣れた、
刺繍した薄絹のとばり、
いつも翼を連ねる美しいおしどりのようだった。
誰が思ったことだろう　私は今やいつも、
ひんやりとした夜のなか孤独に眠っている。

部屋に入っても　風に飛ぶ柳の綿が、
思いに寄り添い　競い合って香炉の烟に向かうのに及ばない。
このたびの別れは、
一生の心残り、
君のことを忘れられない。

七十七、何㮚

何㮚（字は文縝）は、科挙に一番で及第し翰林院に配属となりました。胸の内でみやびを慕い、皆はその品格をうやまいました。ある日、皇帝の親戚の家で宴会がありましたが、酌をしてくれた恵柔という歌姫は、賢くて気がまわり、何㮚の立派な様子を慕って、そっと薄絹のハンカチをほどいて贈りものにし、牡丹の頃に再び会うことを約束しました。何㮚は帰ると、彼女のために〔賡美人〕を作って言いました。

香をうつしたハンカチは藍を揉んでしっとり、
立ち去ろうとするとねんごろに恵んでくれた。
牡丹の頃にもう一度来ることを約束したが、
花の枝が嫉妬して咲くのを遅らせるのではないかと心配だ。

別れてからというもの　しとやかな桃やスモモは見尽くし、
毎日欄干によりかかる。
開花を催促しようにもすべがなく　東風に尋ねてみると、
かぐわしい草むらを飛びめぐるひとつがいの蝶々になった。

この詞もひそかに「（傍線を引いた）恵柔」の二字を隠しています。

七十八、陳襲善

陳襲善が銭塘にいた時、軍営の芸妓の周子文と親しくし、いつも彼女を連れて山や湖をめぐっていました。後に陳襲善は銭塘を去って河朔の役人となりましたが、ある夜のこと奉高の駅亭に泊まり、周子文の夢を見ました。彼女はとばりを掲げて眉をしかめ、何か言いたげでしたので、ひきもどそうとするのですが、できません。悲しげに泣くと消えてしまいました。それからしばらく経って、「子文が死んだ」という昔なじみからの手紙を手にしました。亡くなった日を数えてみると、奉高に泊まっていた時でした。こののち陳襲善は再び杭州に来て、鷲嶺を遊覧し、昔を思い〔漁家傲〕を作って次のように言いました。

鷲嶺の峰を前に一人で欄干によりかかる、
愁いを含んだ眉は損なわれ　愁いに満ちた腸は砕かれた。
べにおしろいの美人は別れを悲しみ、
この思いはどうして終わることがあるだろうか、
山に上り川を眺め　来る年も来る年もそうだろう。

一緒に来たことはずっと覚えているが　今は私一人、
一隻の小舟が光る湖の上をゆらゆらと行く。
枯れた草　斜めに傾く太陽　尽きせぬ思い、
一体誰に送ろうか、
西湖の水は相思の涙。

七十九、趙令畤

劉敞（字は偉明）は、寵愛していた妾を亡くし、（亡妻のために詩を作った）潘岳のように深く悲しみに沈んでおりました。趙令畤は興にまかせて〔清平楽〕を作りました。

春風は昔のまま、
隋の煬帝が築かせた堤の柳に思いを寄せる。
鶯鳥の黄色い綿毛のようなその芽を摘んで行こうとする、
空は清明節の頃。

去年は賑やかな都の通り　東の門、
今朝は雨や雲に閉ざされる魂魄。
一生を憔悴のうちにすごすならば、
いったいいくつの黄昏に耐えられようか。

八十、范仲允

范仲允が相州録事の任にあったとき、長らく家に戻りませんでした。そこで妻は〔伊州令〕を送ってきて次のように言いました。

西風が夜にはカーテンをくぐり抜けて入ってきて、
私の部屋に寂しさを添える。
いましも梧桐がその大きな葉を落とす時、
又もゆっくりと、秋の光景が消えていく。

思いのこもったお手紙をことづてられないのは、
それを運ぶ魚も鳥もぐずぐずしているからかしら。
私に一人空っぽの寝室を守らせるから、
涙のつぶが、灯の火花と一緒にこぼれ落ちる。

妻が寄こした手紙は、「伊（あなた）」の字を「尹」に書き間違えていましたので、范氏は「どうやらあなた（伊）の家には私（人）が要らないらしい」とからかって返しました。すると妻はさらに「あなたとお別れしている時間があまりに長いものですから、側に眠る人が欠けているのです」と答えてきました。これもまた良家の子女の中でも賢く弁が立つものと言えましょう。

八十一、関注

北宋末の方蛸の乱のとき、関注（字は子東）は、銭塘から避難して毘陵の崇安寺に仮住まいしていました。ある日のこと、次のような夢を見ました。

水辺の建物に行きますと、主人が出てきて客としてもてなしてくれました。黒い衣装をまとい赤茶色の美しいほおひげをたくわえた主人は、両手を組んで会釈し席に着きますと、二人の女子に銅の杯で酒を酌ませました。そしてこう言いました。「これからお聞かせする新曲は、まずは天上の役所で演奏し、それからようやく人間の世界に伝わるものです。いつか東南の戦いが止んだら、〔太平楽〕という新しい歌が現れますが、先にその曲をお聴かせしましょう。」そして二人の女子に舞いながら歌わせますと、主人の老人は手を打って調子をとりました。

目が覚めてもなお五拍分を覚えておりましたので、関注は七言の句でこれを記録しました。方蛸の乱が平定されて杭州に帰り、菩提寺に仮住まいしていますと、また前のほおひげの老人が夢に現れ、笛を腰にさし、手には冊子を開いて関注に見せました。白い紙に赤い罫線、行の間は楽譜のようですが、曲調はあるのに歌詞がありません。老人は笑って「待っておりましたよ」と言いました。そして「前に梁渓

では、〔太平楽〕を演奏してあげましたが、まだ覚えていますか」と尋ねます。関注が夢の中でそれを歌いますと、ほおひげの老人は笛を手にし、再びひとしきり演奏しました。関注はまた黙ってその曲調を記憶に留めましたが、どうやら短い詞を二回繰り返しています。

その後、関注はまた夢の中であるところに到りましたが、「広寒宮」という額がかかり、鍵は開いていません。ある人が「鈴のひもを引いて月の仙女を呼べば、戸は自然に開きます」と言うので、その言葉に従いますと、そのとおりでした。戸が開き、ある人が建物に引き入れてくれ、玉の冠に霞の衣を着た二人の仙女に会いました。あれは誰かと密かに尋ねますと、案内してくれた者が「月の仙女ですよ」と言い、互いに丁寧に挨拶をしました。仙女は「梁渓では二つまげの娘に〔太平楽〕を授けさせ、またほおひげの老人に新曲を伝えさせましたが、どれも覚えていますか」と尋ねます。関注がすべて歌ってみせますと、仙女はたいそう喜び、また一枚の紙を取り出して関注に示し、「これも新曲です」と言うと、自らそれを歌いましたが、そのメロディーは楽府の〔昆明池〕に似ていました。関注は無理にもこれを覚えようとしましたが、仙女は難色を示し、手の中の紙を見るとすでに変化し、字もまた消えました。会釈して退席しました。目覚めた時には最後の句を覚えているだけでしたが、もうどうしようもありませんでした。関注は前後三回夢を見ましたが、そのメロディーはおおかた忘れてしまいました。ただ美しいほおひげの老人の笛の音色だけは、なおも記憶していました。そこでこの曲調に合わせて、〔桂華明〕を作って言いました。

はるかな神仙世界　仙人の住まいが開かれ、
月の広寒宮の仙女に会った。
私に　ふたりの仙女の梁渓の舞を、
まだ覚えているかと尋ねたのは、
その時のことだっただろうか。
歌舞の上手な碧玉に仙界の言葉を教え、
私のために歌を歌わせた。
白い月の光が窓に満ちているが　あの人はどこにいるのか。
歌声はまだ途切れないけれど、
仙界にある瑶台への路ははるか。

八十二、貴人の詞

政和年間のこと、ある高貴な人物がまだ世に出ない時に、崔念四（さいねんし）の妓楼で遊び、その兄弟の順（の四）にちなんで、〔踏青游〕を作って言いました。

知り合ったどの人も、
楽しい逢瀬をちょうど二年でやめてしまう。
さいころの、
六双渾四のようだ。
（神女の住む）巫山に向かって、
どんどんと進んでいくと、
水を得た魚のよう。
二人の思いはうるわしく、
一緒に十二の美しい欄干に身をもたせ、
もたせては又よりかかる。
二日来なければ、
いつもいつも私の心の中にいる。
占いをすれば、

いつでもいつ帰ってくるかを占う。
三八（二十四日）の潔斎をすてて、
おしどりの模様の布団を永遠にともにできるよう願う。
夢の中に来ていたのに、
不意におこされ、
夢も尻切れトンボ。

八十三、年増の芸妓

〔撷芳詞〕は皇帝の御殿から伝わったものです。当時ある年増の芸妓が楽官に嫁ぎ、いつも後宮に行っては歌舞を教えていて、この曲を会得し、外に伝わったのでした。一時は皆この曲が大好きで、争って歌ったものです。その歌詞は次のようでした。

風が揺すり、
雨にけむり、
緑の枝は柔らか　花は重そうに垂れる。
春のシャツにぴっちりと身を包み、
香り立つ肌はしっとり湿る。
覚えている　あの年、
あなたと一緒に摘んだのを。

すべては夢のよう、
一体何を一緒にしたのだったか。
可哀想に　ピンについた鳳の飾りのようにひとりぼっち。
関所のある山に隔てられ、
夕方の雲はみどりに沈む。
燕が来ても、
又も便りは無し。

この曲調はのちに〔釵頭鳳〕と名付けられ、最後に字を重ねて加えています。

八十四、盧氏（ろし）

蜀（ショク）へ向かう道に泥渓駅（デイケイ）があります。天聖年間のこと、盧氏の娘が、父に連れられて蜀に行きました。父は、漢州（カンシュウ）の県の長官でした。任期を終えて東へ帰るとき、壁に次のように書きました。

蜀の道は青い空がもやにかげり、
華やかな都は、
遙か遠くていつ着くことか。
錦川を振返り化粧を溶かす涙をぬぐう。
鳳の飾りピンは黒くつややかな髪に斜めに垂れ下がる。

螺鈿の帯は二つに垂らし　金の縫い取りは細やか。
玉の帯飾り　真珠の耳飾り、
露がこぼれて水のようにひんやりする。
これからは鸞鏡にむかって化粧するのに遠くを思う心を添え、
眉を描くには遙かな山の緑をまねることができるだろう。

八十五、紫竹（しちく）

方喬（ほうきょう）は、楽至（ラクシ）の人で、紫竹という娘と慕いあっておりました。紫竹は詞が上手で、方喬に〔生査子〕を贈ったことがあって次のように言いました。

朝早く鶯が啼いて止まず、
愁いに満ちた人を起こしてしまった。
ぐんなりとして朝の化粧もものうく、
蓮の小さな丸い葉を浮かべた水をしずかに触る。

女友達を呼び、
花かげで草を戦わせようかしら。
愛らしさはきわまっても羽目をはずすことはなく、
屏風によりかかっている。

また方喬と望雲門で少しだけ会おうとを約束し、垣根のかげで待ちながら、しずかに花の小道を歩いていますと、くつの底がすっかり湿ってしまったのに、方喬はまだ来ません。急に人の話し声がしましたので、しょんぼりして帰りますと、〔踏莎行〕を送りました。

柳に酔い鶯につられて道に迷い、
風に疲れ　草を身にそわせる。
あなたと会う約束をした門へ続くしずかな道。
白い壁のかげ　あなたが来るのを待って、
苔には小さなくつ跡を残した。

花は日に影を移し、
カーテンに香は立ち上らなくなった。
待っていてもあなたは来ない　心は杵でつかれるよう。
人目をしのんで悲しく部屋に入ると屏風にもたれ、
さまよい出た魂はまだ垣根のあたりをめぐっている。

のちに二人はとうとう添い遂げました。

八十六、金杯を盗んだ婦人

徽宗皇帝の御代のこと、正月十五日には灯籠をともして、皆に思う存分見ることを許し、それぞれに一杯の酒を賜りました。一人の婦人が飲んだ金杯を盗んで隠しましたが、守衛の兵士がこれを見つけ、捕まえて御前に突き出しました。婦人は〔鷓鴣天〕を口からそらで作りました。

月は蓬莱山に満ち　きらきらと輝く灯。
あの人と手をつないで宮殿の南門にやってきた。
鶴陣から笛の音があがるのを懸命に見ていて、
おしどりが群からはぐれたのにも気づかなかった。

空はだんだん明けていき、
陛下の御恩の有り難いことに、
賜ったお酒の杯が巡ってきた。
家に帰れば舅姑に叱られるのが恐ろしい、
こっそり金の杯をいただいて証拠にしよう。

皇帝はたいそうお悦びになり、そのまま金杯を賜り、兵士に送らせました。